



行動する横幹連合を目指して

原山 優子*



日本にとって変動の年となった2009年。それに続く2010年は、新たに提唱されたパラダイムを、理想論としてではなく、社会的な受容に裏付けられた具体的なアクションへと変換させる年となる。この変革の社会実装は、国民から信託を受けた政府にとって喫緊な政策課題であり、変化を選択した国民が注目と期待を寄せるところでもあるが、一国の政治の司り方のみならず、経済・社会システムの在り方をも揺らがすものであることから、社会的に最適な経路を見出すことは容易ではない。また直面する課題は複合的であり、その多くは時とともに累積され、複雑性を増してきたものであり、それが故、解を提示する際に、複数の異なる利益集団の間である種の裁定がなされることになり、場合によっては平衡化の視点から政府のアクションも必要となる。更には日本を取り巻く諸国の動き、地球規模で起こる動きは刻一刻と変化するという条件の中で、日本のポジショニングを見出すことも要求される。

2010年は課題山積でのスタートとなるが、確実に言えるのは、変革の息吹は不可逆であるという点で、そこでは誰がイニシアティブを取るかが問われる。民主主義に基づく国家において主権は国民にあり、選挙というプロセスを介して権利を行使するわけだが、この基本的な権利と対をなす「自らが行動を起こす」という責務を国民が果たすべき時が来たように思える。

そこで、巻頭言の場をお借りして、横幹連合の会員の皆様とご一緒に、科学技術に携わるものにとっての「行動のフィールド」について考えてみたい。

まず、人間が人間であるが所以の「知への欲」を、プロフェッショナルリズムをもって知識の創造へと結び付けていく、この役割を日本という境界線に制

約されることなく担っていくことは言うまでもない。また、この営みは、社会の中で、そして社会との相互作用の中で、新たな技術、システム、ひいては社会構造を派生させていくわけで、そのプロセスにおいても様々な活躍のフィールドが存在する。技術、デザイン、システムなどに経済的な価値を付加する企業体、社会的な価値を醸成するNPOなどの組織体、市場メカニズムからは十分に提供されることのないサービスの供給を担う公的セクター、国・地方として発展の指針を打ち出し、それに基づき政策を執行する中央・地方政府、などであるが、科学技術のプロフェッショナルがこれらのフィールドで主体として、あるいはアドバイザー、メンターなどの立場から社会変革の原動力となることが期待される。

その際、それぞれの専門分野において培ってきた知見、経験を総動員することは当然ながら、更に問われるのが、自らの専門性の殻に閉じこもることなく、他分野の視点から課題を捉える力、横断的に考察する力、異なる価値観を持つ人と協働する力であり、そのためには、日本がこれまでに築き上げてきた専門性に立脚した科学技術システムの中にこれらのコンピテンシーを高めるための仕掛けを埋め込むことが必須となる。横幹連合は、正に科学技術のプロフェッショナルにその場を提供するものであり、すでに横断的なアプローチが実践されている。

時代の要請を先取りした形で活動を展開してきた横幹連合だが、2010年をスタートするにあたり、これまでの試みから学ぶところは学び、培った実績を踏み台とし、更に横断的に輪を広げ、上記のフィールドに様々な切り口から貢献していくことを提唱する。そして、会員の皆様方の横断的なインターアクションから現場に変革をもたらすイノベティブなアクションが生まれてくると確信する。

*東北大学大学院 工学研究科 教授、横幹連合副会長